

源氏物語

柏木

紫式部

青空文庫

死ぬる日を罪むくいなど言ふきはの涙
に似ざる火のしづくおつ
(晶子)

右衛門督うえもんのかみ

の病氣は快方に向くことなしに春が来た。父の大臣と母夫人の悲しむのを見ては、死を願うことは重罪にあたることであると一方では思いながらも、自分は決して惜しい身でもない、子供の時から持つていた人に違つた自尊心も、ある一つ二つの場合に得た失望感からゆがめられて以来は厭えん世せい的な思想になつて、出家を志していたにもかかわらず、親たちの歎なげきを顧みると、この絆ほだしが遁とん世せいの実を上げさすまいと考えられて、自己を紛らしながら俗世界にいるうちに、ついに生きがたいほどの物思いを同時に二つまで重ねてする身になつたことは、だれを恨むべくもない自己のあやまちである、神も仏も冥みよう助じよを垂たれたまわぬ境界に墮おちたのは、皆前生での悲しい約束事であろう、だれも永久の命を持たない人間なのであるから、少しは惜しまれるうちに死んで、簡単な同情にもせよ、恋しい方に憐あわれだと思われすることを自分の恋の最後に報いられたことと見よう、しいて生きていて自己の悪名も立ち、なお自分をもあの方をも苦しめるような道を進んで行くより

は、無礼であるとお憎しみになる院も、死ねばすべてをお許しになるであらうから、やはり死が願わしい、そのほかの点で過去に院の御感情を害したことはなく、長く恩顧を得ていた以前の御愛情が死によつて蘇よみがえつてくることもあるであらうとこんなふうに思われることが多い哀れな衛門督であつた。なぜこう短時日の間に自分をめちやめちやにしまつたのであらうと煩悶はんもんして、苦しい涙を流しているのであるが、病苦が少し楽になつたようであると、家族たちが病室を出て行つた間に衛門督は女三によさんの宮みやへ送る手紙を書いた。もう私の命の旦夕たんせきに迫つておりますことはどこからとなくお耳にはいつていて、うが、どんなふうかともお尋ねくださいませんことはもつともなことです、私としては悲しゅうございます。

こんなことを書くのにも衛門督は手が慄ふるえてならぬために、書きたいことも書きさして先を急いだ。

今はとて燃えん煙も結ばほれ絶えぬ思ひのなほや残らん

哀れであるだけでも言つてください。それに満足します心を、暗い闇やみの世界へはいり

ます道の光明にもいたしましょう。

と結んだのであった。

小侍従にもなお懲りずにかみ督は恋の苦痛を訴えて来た。

直接もう一度あなたに逢つて言いたいことがある。

とも書いてあった。小侍従も童女時代からおば伯母の縁故で親しい交情があったから、だいそれた恋をする点では、迷惑な主人筋の変わり者であると面倒には思っていたものの、生きる望みのなくなっている様子を知っては悲しくて、泣きながら、

「このお返事だけはどうかすすってくださいまし。これが最後のことでございましょうから」

と宮へ申し上げた。

「私だってもういつ死ぬかわからないほど命に自信がなくなっているのだから、そうした気の毒な容体でいる人としてだけに同情もされるけれど、私はもう苦しめられることに懲りているのだから、返事などをしてかかりあいになるのは非常にいやに思われる」

こうお言いになって、宮は書こうとあそばさない。自尊心がおりになるのではなくて、これは院のお心に御自身のあそばされた過失の影がおりおりさして、悩ましい御様子をお

見せになることもあるのを、恐ろしく苦しいことと深く思つておいでになるからである。小侍従はそれでも硯^{すずり}などを持つて来て責めたてるので、しぶしぶお書きになった宮のお手紙を持つて、宵^{よい}闇^{やみ}に紛れてそつと小侍従は衛門督^{えもんのかみ}の所へ行つた。

大臣^{やまと}は大和^{やまと}の葛城^{かつらぎ}山から呼んだ上手^{じょうず}な評判のある修験者^{しゆげん}にこの晩^{かみ}は督^{かみ}の加持^{かじ}をさせようとしていた。祈^き禱^{とう}や読^ど経^{きやう}の声も騒^{どき}がしく病室^{びやうしつ}へはいつて来た。人が勧めるままに、世の中へ出ることをしない高僧^{こうそう}などで、世間からもまたあまり知られていないような人も、遠い土地へ息子^{むすこ}たちを派遣^{はんぱん}などして呼び迎えて衛門督^{えもんのかみ}の病氣^{びやうき}に効験^{きうげん}の現^{あらわ}れることを期している大臣であるから、見て感じの悪いような野卑^{やひ}な僧^{そう}などがあとへとこのごろはたくさん来るのである。病人は何という名の病患^{びやうわん}でもなくて、ただ心細^{こま}いふうに時々泣き入つていたりするのを、陰陽師^{おんようし}なども多くは女の霊^{たま}が憑^ついていると占つていたので、そうかもしれないと大臣は思い、他へ憑^つきものを移そうとしてもなら物怪^{もののけ}の手がかりが得られないのに困り、こうして遠国の修験者^{しゆげん}などと呼び集めることもするのであつた。今度山から来た僧も大男で、恐ろしい目つきをして荒々しく陀羅尼^{だらに}を読んでいるのを、衛門督は、

「ああいやになる。私は罪が深いせいなのか、陀羅尼^{だらに}を大声で読まれると恐ろしくて、ま

すますそれで死ぬ気がする」

と言いながら病床を出て、小侍従のいる所へ来た。大臣はそんなことを知らず、病人は寝入っていると女房たちに言わせてあつたのでそう信じて、ひそかにこの山の僧と語っていた。大臣は年がいつてもなおはなやかな派手な人で、よく笑う性質なのであるが、こうした侮蔑するに価する山の修験僧と向き合つて、衛門督の病気の当初から、その後なんということなしに重くばかりなつてゆくことなどをこまごまと語っていた。

「どうかあなたの力で物怪が正体を現わして来るようにやってほしいものです」

とも信頼したふうで言っているのも哀れであつた。

「小侍従、聞いてごらん。何の罪で私がこうなっているかをご存じないものだから、女の霊が憑いているなどとごまかされておいでになるが、あの方以外に女として惹くものがない私の心へ、あの方の霊が真実憑いていくれるのなら、いやでならない自分の身もありがたくなるだろうよ。それにしてもだいそれた恋をして、あるまじい過失を引き起こして、人のお名を穢し、自身を顧みないようになる人は自分だけではない、昔の人にもあつた罪なのだともみずから慰めようとするがね、そんなことで私の心は救われないのだよ。相手があの方なのだから、自責の念に堪えられまいではないか。生きていることももうまぶしく

てならなくなつたというのは、昔から世の中の人が言うように、一種特別な光の添つた方らしい。大罪人でもないのに、お顔を見合わせた瞬間から私の心は混乱してしまつて、脱け出した魂魄が六条院をさまよつてゐるようなことに気がついた時には君、まじないをしてくれたまえ」

などと、衰弱して殻のようになった姿で、泣きも笑いもして衛門督は語るのであつた。宮が非常にお恥じになつてゐる御様子、物思ひばかりをしておいでになるということも小侍は告げた。自身が今冗談で言い出したことではあるが、その宮をおいたわしく、恋しく思う魂魄はそちらへ行くかもしれないというような氣も衛門督はしていっそう思い乱れた。

「もう宮様のお話はいつさいすまい。不幸で短命な生涯に続いて、その執着が残るために未来をまた台なしにするとと思うのがつらい。心苦しいあのことを無事にお済ましになつただけはせめて聞いて死にたい氣もするがね、私たちを繋ぎ合わせた目に見えぬものを私が夢で見た話なども申し上げることができないままになるのが苦痛だよ」

と言つて深く督の悲しむ様子を見ていては、小侍従も堪えきれずなつて泣きだすと、その人もまた泣く。蠟燭をともしさせてお返事を読むのであつたが、それは今も弱々しいは

かない筆の跡で、美しくは書かれてあった。

御病気を心苦しく聞いていながらも、私からお尋ねなどのできないことは推察ができるでしょう。「残るだろう」とお言いになります、

立ち添ひて消えやしましうきことを思ひ乱るる煙くらべに

私はもう長く生きてはいないでしょう。

内容はこんなのであった。衛門督は宮のお手紙を非常にありがたく思った。

「このお言葉だけがこの世にいるうちのひとつもうれしいことになるだろう。はかない私だね」

いつそう強く督は泣き入って、またこちらからのお返事を、横になりながら休み休み書いた。鳥の足跡のような字ができる。

「行くへなき空の煙となりぬとも思ふあたりを立ちは離れじ

とりわけ夕方には空をおながめください。人目をおはばかりになりますことも、対象が実在のものでなくなるのですからいいわけでしょう。そうしてせめて永久に私をお忘れにならぬようにしてください」

などと乱れ書きにした。病苦に堪えられなくなつて、

「ではもういいから、あまりふけないうちに帰つて行つて、宮様に、こんなふうに死が迫つてゐるということを申し上げてください。どうした前生の因縁からこんなに道にはずれた思いが心に染みついた私だろう」

泣く泣く病床へ衛門督は膝入り入るのであつた。平生はいつまでもいつまでも小侍従の前に置いて、宮のお噂を一つでも多く話させたいようにする人であるのに、今日は言葉も少ないではないかと思うのも物哀れで、小侍従は出て行けない気がした。容体を伯母の乳母も話して大泣きに泣いていた。大臣などの心痛は非常なもので、

「昨日今日少しよかつたようだったのに、どうしてこんなにまた弱つたのだらう」と騒いでいた。

「そんなに御心配をなさることはありません。どうせもう私は死ぬのですから」と衛門督は父に言つて、自身もまた泣いていた。

女三の宮はこの日の夕方ごろから御異常の兆^{きざし}が見え出して悩んでおいでになるので、経験のある人たちがそれと気づき、騒ぎ出して院へ御報告をしたので、院は驚いてこちらの御殿へおいでになった。お心のうちではなんら不純なことがなくて、こうしたことにあうのであったら、珍しくてうれしいであろうと思^{おぼしめ}召されるのであったが、人にはそれを氣どらすまいと思召すので、修験の僧などを急に迎えることを命じたりしておいでになった。修法のほうはずっと前から続いて行なわれているので、祈^{きとう}祷の効験をよく現わすものばかりを今度はお集めになって加持をさせておいでになった。一晚じゅうお苦しみになって日の昇るころにお産があつた。男君であるということをお聞きになって、また院は隠れた秘密を容貌^{ようぼう}の似た点などでだれの目にも映りやすい男であることが、苦しい、女はよく紛らすこともできるし、多くの人が顔を見るのでないからいいのであるがとお思いになった。しかし素姓の紛らわしいことは男の身にあつてもよいが、どんな高貴な方の母になるかもしれないぬ女性は生まれが確かでなければならぬ点から言えば、これがかえってよいかもしれないとまたお思い返しになった。忘れることもない自分の罪のこれが報いであろう、この世でこうした思いがけぬ罰にあつておけば、後世^{ごせ}で受ける咎^{とが}は少し軽くなるかもしれぬなどとお考えになった。

宮の秘密はだれ一人知らぬことであつたから、尊貴な内親王を母にして最後にお設けになつた若君を、院はどんなにお愛しになるだろうという想像をして、家司^{けいし}たちは大がかりな仕度^{したく}を御出産祝いにした。六条院の各夫人から産室への見舞い品、祝品はさまざまに意匠の凝らされたものであつた。折敷^{おしき}、衝重^{ついがさね}、高杯^{たかつき}などの作らせようにも皆それぞれの個性が見えた。五日の夜には中宮^{ちゅうぐう}のお産養^{うぶやしなひ}があつた。母宮のお召し料をはじめとして、それぞれの階級の女房たちへ分配される物までも、お后^{きさき}のあそばすことらしく派手^でにそろえておつかわしになつたのである。産婦の宮への御粥^{かゆ}、五十組の弁当、参会した諸官吏への饗応^{きようおう}の酒肴^{しゅこ}、六条院に奉仕する人々、院の庁の役人、その他にまでも差等のあるお料理を交付された。院の殿上人とともに中宮職の諸員は大夫^{たゆう}をはじめ皆参つていた。七日の夜には宮中からのお産養があつた。これも朝廷のお催しで重々しく行なわれたのである。太政大臣などはこの祝賀に喜んで奔走するはずの人であつたが、子息の大病のためにほかのことを思う間もないふうで、ただ普通に祝品を贈つて来ただけであつた。宮がたや高官の参賀も多かつた。

院内にもこの若君を珍重する空氣が濃厚に作られていながら、院のお心にだけは羞恥^{しゆううち}を感じになるようなところがあつて、宴席をはなやかにすることなどはお望みになれな

いで、音楽の遊びなどは何もなかった。女三の宮は弱いお身体からだで恐ろしい大役の出産をあそばしたあとであつたから、まだ米湯おもゆなどさえお取りになることができなかった。御自身の薄命であることをこの際にもまた深くお思われになつて、この衰弱の中で死んでしまいたいともお思いになるのであつた。院は人から不審を起こさせないことを期して、上手じょうずに表面は繕つておいでになるが、生まれただけの若君を特に見ようともなされないのを、老いた女房などは、

「御愛情が薄いではありませんか。久しぶりにお持ちになつた若様が、こんなにまできれいでいらつしやるのに」

などと言っているのを、宮は片耳におはさみになつて、この薄いと言われておいでになる愛情は、成長するにつれてますます薄くなるであらうと、院がお恨めしく、過去の御自身も恨めしくて、尼にならうというお心が起こつた。夜などもこちらの御殿で院はお寝やすみにならずに、昼の間に時々お顔をお見せになるだけであつた。

「人生の無常をいろんな形で見ていて、もう自分は未来が短くなっているのだからと思うと心細くて、仏勤めばかりをする癖くせがついて、産屋うぶやの騒がしい空気と自分とはしっくり合わない気がされてたびたびは来ないのですが、気分はどうですか。少しさっぱりしたよう

に思いますか。気の毒ですね」

と、お言いになりながら院は几帳きちようの上から宮をおのぞきになった。宮は頭かしらを少しお上げになって、

「まだ私には快くなる自信ができません。でね、こんな際に死んでは罪が深いと聞いておりますから、尼になりまして、その功德であるいは生きることができるかどうかためしたくもありますし、また死にましても罪が軽くなるでしょうからと思われまして、そういったくなりました」

平生にも似ずおとなびてお言いになった。

「とんでもないことですよ。なぜそうまで悲観するのですか、産をするとだれも皆そんなふうに恐ろしく不安になるものですが、子を産んだ人が皆死ぬものではありませんからね。気を静めるようになさい。そんなことは言わずに」

と院はお言いになった。お心の中ではその希望が自発的に起こったのなら、そうさせてしまったほうが自分の心が楽になって、深く今後この人を愛することが可能かもしれぬ、今までと同じように取り扱っていても、同じにならぬものが自分の心にあつてはおかわいそうである、自分ながらも以前の愛情がこのまままた帰って来ようとは思われない、自分

はどんなに努めても暗い霧が心を横切るとは免れまい、自然宮への愛が薄くなったように他人が思うことも予想され、その時の宮のお立場も苦しかろうと思われる。法皇がお聞きになつても自分が悪いことにばかりなるであらう、病氣に託してそうおさせしようかとお思われになるのであつたが、またそれを実現させるのが惜しくも哀れにもお思われになり、若盛りの姿を尼に変えさせるのも残酷に思召されて、

「ぜひと強く生きようとお努めなさい。この上そうまで悪くなるわけはありませんよ。もうだめかと思われていた人さえ癒つてきた例が近い所にあるのですから、それを思うとまだこの世は頼みになりますよ」

などと言いになつて、白湯さゆを勧めたりして院はおいでになるのであつた。宮のお顔色は非常に青くて力もないふうに寝ておいでになるが、たよりない美しさをなしているのを御覧になつては、どんな過失があつても自分のうちの愛の力が勝つて許しうるに違いないのはこの人であると院は思召した。

御寺みでらの院は、珍しい出産を女三にょさんの宮みやが無事にお済ませになつたという報をお聞きになつて、非常にお逢あいになりたく思召したところへ、続いて御容体のよろしくないたよりばかりがあるために、専心に仏勤めもおできにならなくなった。衰弱しきつた方がまた幾日

も物を召し上がらないでおいでになったのであるから、いつそう頼み少なくお見えになる宮が、

「長いことお目にかかれずに暮らしておりましたころよりも、もっともっと私はお父様が恋しくてなりませんのに、もうお目にかかれないうまま死んでしまうのでしょうか」

と言つて、非常にお泣きになったので、六条院はそのことを人から法皇にお伝えさせになると、法皇は堪えがたく悲しく思召して、よろしくない行動であるとは思召しながら、人目をはばかりて夜になつてから六条院へにわかに御幸あそばされた。御主人の院はお驚きになつて、恐懼きようくの意を表しておいでになった。

「もうこの世のことは顧みますまいと決心していたのですが、こうなつてもまだ迷うのは子を思う道の闇やみだけで宮が重態だと聞くと仏のお勤めも怠るばかりで恥ずかしくてなりませんが、だれが先とも後あととも定まらない人の命であれば、逢いたがる子に逢つてやらずに死なせましたら、親の心残りが道の妨げになる気がするので、人間世界の譏そしりも無視して出て来たのです」

法皇はこう仰せられた。御僧形ではあるが艶えんなところがなお残つてなつかしいお姿にたいそうな御法服などは召さずに墨染め衣の簡単なのを御身にお着けあそばされたのがこと

に感じよくお美しいのを、院はうらやましく拝見されて、例のようにまず落涙をあそばされた。

「御容体は何という名のある病気ではないのでございますが、今まで衰弱がはなはだしゅうございましたところへ、お食慾のないことが重態に導いたのでございます」

などと六条院はお話しになつて、

「失礼な場所でございますが」

と、宮のお寝^{やす}みになつた帳台の前へお敷き物の座を作つて法皇を御案内された。宮を女房たちがいろいろとお引き繕^きいして御介抱をしながら、宮をもお床の下へお降ろしした。

法皇は間の几帳^{きちよう}を少し横へお押しになつて、

「夜居^{かじ}の加持の僧のような気はしても、まだ効験を現わすだけの修行ができていないから恥ずかしいが、逢いたがつておいでになつた顔をそこでよく見るがいい」

と法皇は仰せられて目をおふきになつた。宮も弱々しくお泣きになつて、

「私の命はもう助かるとは思えないのでございますから、おいでくださいましたこの機会に私を尼にあそばしてくださいませ」

こうお言いになるのであつた。

「その志は結構だが、命は予測することを許されないものだから、あなたのような若い人は今後長く生きているうちに、迷いが起こって、世間の人にそし譏られるようなことにならぬとは限らない。慎重に考えてからのことにしては」

などと法皇はお言いになつて、六条院に、

「こう進んで言いますが、すでに危篤な場合とすれば、しばらくもその志を實現させることによつて仏のみょうじよ冥助を得させたいと私は思う」

と仰せられた。

「この間からそのことをよくお話になるのですが、物怪もののけが人の心をたぶらかして、そんなふうのことを勧めるのでしようと申して私は御同意をしないのでございます」

「物怪の勧めでそれを行なうと言つても、悪いことはとめなければなりません、衰弱してしまつた人が最後の希望として言っていることを無視しては、後悔することがあるかもしれぬと私は思う」

法皇の仰せはこうであつた。お心のうちでは限りもない信頼をもつて託しておいた内親王を妻にしてからのこの院の愛情に飽き足らぬところのあるのを何かの場合によく自分は聞いていたが、恨みを自分から言い出すこともできぬ問題であつて、しかも世間に取り沙

汰されるのも忍ばねばならぬことを始終残念に思っているのであるから、この機会に決断して尼にさせてしまおうとしても、良人おっとに捨てられたのだと、世間から嘲罵ちやうばされるわけのものではない。少しも遠慮はいらぬ。現在において宮の望みは遂げさせなくてはならない、夫婦関係の解消したのちに、単に兄の子として保護してくれる好意はあるはずであるから、せめてそれだけを自分から寄託された最後の義務に負ってもらうことにして反抗的にここを出て行くふうでなくして、自分からかつて宮に分配した財産のうちに広くてりっぱな邸宅もあるのであるから、そこを修繕して住ませよう、自分がまだ生きておられるうちにそれらの処置を皆しておくことにしたい。この院も妻としては冷ややかに見ても、今からの宮を不人情に放つてはおかまい。自分はその態度を見きわめておく必要があると思召して、「では私がこちらへ来たついでにあなたの授戒を実行させることにして、それを私は御みほと仏けから義務の一つを果たしたことと見ていただくことにする」

と仰せられた。六条院は遺憾に思いになった宮の御過失のこともお忘れになって、なんとすることかと心をお騒がせになって、悲しみにお堪えにならずに、几帳の中へおはいりになって、

「なぜそういうことをなさろうというのですか。もう長くも生きていない老いた良人おっとをお

捨てになつて、尼になどなる氣になぜおなりになつたのですか。もうしばらく氣を静めて、湯をお飲みになつたり、物を召し上がったりすることに努力なさい。出家をすることは尊いことでも、身体が弱ければ仏勤めもよくできないではありませんか。ともかくも病氣の回復をお計りになつた上でのことになさい」

とお話しになるのであるが、宮は頭をお振りになつて、おとめになるのを恨めしくお思ひになるふうであつた。何もお言ひにはならなかつたが、自分を恨めしくお思ひになつたこともあるのではないかとお氣がつくと、かわいそうでならない氣があそばされたのであつた。いろいろと宮の御意志を翻えさせようと院が言葉を尽くしておいでになるうちに夜明け方になつた。御寺へお歸りになるのが明るくなつてからでは見苦しいと法皇はお急ぎになつて、祈禱のために侍している僧の中から尊敬してよい人格者ばかりをお選びになり、産室へお呼びになつて、宮のお髪を切ることをお命じになつた。若い盛りの美しいお髪を切つて仏の戒をお受けになる光景は悲しいものであつた。残念に思召して六条院は非常にお泣きになつた。また法皇におかせられては、御子の中でもとりわけお大事に思召された内親王で、だれよりも幸福な生涯を得させたいとお思ひあそばされた方を、未来の世は別としてこの世でははかない姿にお変えさせになつたことで萎れておいでになつて、

「たとえこうおなりになっても、健康が回復すればそれを幸福にお思いになって、できれば念誦ねんずだけでもよくお唱えしているようになさい」

とお言いになった院は、まだ暗いうちに六条院をお去りになることにあそばされた。

宮は今もおお命がおぼつかない御様子で、はかばかしく御父法皇を目送あそばすこともおできにならず、ものもお言われにならなかった。

「夢を見ておりますようなことが起こりまして、心が混乱しております際で、昔の御厚情をまたお見せくださいました御幸みゆきに感謝の意もまだ表してお目にかけることができませんような不都合さも、また私が伺わつてお詫わびすることにいたしましょう」

と六条院は御挨拶あいさつをあそばされた。そしてこの院の役人たちを御寺へお見送りにお出しになるのであった。

「もう今日か明日かに終わるように自分の命の危険さが思われた際に、あとに残して保護者もなく寂しくこの世を渡らせることが憐あわれまれてならぬ時に、御本意ではなかったでしょうが、あなたへお託しさせていただいて、今までは安心していたのですが、万一かれの命の助かることがありますれば、もう普通の人ではなくなりました者が、人出入りの多い宮殿にいますことは似合わしく思われませんし、郊外の寂しい所へ住ませるのもさすがに

また心細く思うことでしょうか、その点をあなたがお考えくだすって住居すまいを移させることにしていただきたい。どうか今後もかれを念頭にお置きください」

と法皇がお言いになると、

「そんな仰せまでも受けましてはかえって私が恥じ入ります。自分の精神がよく統一されていくのを待ちましてすべてのことに善処いたしましょう」

院は實際悲しみに堪えぬ御様子であつた。後夜ごやの加持の時に物怪もののけが人に憑うつつて来て、

「どう、こんなことになつてしまつたではないか。上手じょうずに一人を取り返したと思つておいでになる様子がくやしかつたから、それからは氣のつかぬようにしてこちらへ私は来ていたのだ。もう帰りますよ」

と笑つた。これによれば紫夫人を悩ました物怪が、それ以来こちらへ憑いていたのであつたか、あらゆる不祥事はかれがなさしめたのかもしれない。お気づきになつた時、女三の宮がおかわいそうでならぬ氣のされる院でありになつた。宮の御容体は少し持ち直したようであつたが、まだ危険状態を脱したとはお見えにならないのである。女房たちも御出家をあそばしたことで失望した様子であつたが、たとえばこうおなりになつても御健康さえ取りもどすことができると、今はそれを院もお念じになつて、修法もまた延ばさせて、

油断なく祈らせることもあそばしたし、そのほかのあらゆる方法もおとりになって、宮のお命の助かるようにとばかり苦心あそばされるのであった。

右衛門督うへもんのかみ

頼み少ない容体になってしまった。夫人の女二にょにの宮みやをおかわいそうにばかり思われる衛門督は、助からぬ命にきまった今になって、ここへ宮がおいでになることは軽々しく世間が見ることであろうし、父母が始終近くへ来ている病室では、自然お姿をそれらの近親者に見られておしまいになる隙すきができることになってはもったいないと思つて、

「どんな無理をしてでも一条の宮へもう一度行つてみたいのです」

と言いつけるのであるが、両親は許さなかつた。衛門督はだれにも自分の死後はこの宮を御保護申すようにということを頼んでいた。もともと宮の母君みやすどころの御息所はこの結婚に不賛成であつたのが、衛門督の父の大臣の熱心な懇望が法皇を動かしたてまつて、お許しになることになつたものであつて、六条院の二品にほんの宮みやの御幸福のかんばしくない噂うわさなどがお耳にはいつたころには、

「かえつて二の宮のほうが将来の頼もしい良人おとこを得たというものだ」

と法皇が仰せられると聞いたこともあつたのに、なんという成り行きになることかと今

は悲しむばかりであつた。

「こんなふうで宮様を未亡人にしてしまうのかと思いますと堪えられません。あちらにもこちらにもお気の毒なことばかりですが、自分の心に任せないのが命ですからしかたありません。宮様の今後の寂しい生活を思いますと心苦しくなりませんから、お母様は親切にしてあげてください。始終お世話をしてあげてくださいお母様」

と督^{かみ}は母夫人にも言つていた。

「縁起の悪い話をしますね。あなたに死なれたあとで、お母様はどれだけ生きておられると思つてそんな未来のことまでも言うのですか」

と言つて、母はまず泣き入ってしまうので、衛門督はよく話すこともできないのである。すぐ下の弟である左大弁に兄はくわしく宮の御事は遺言しておいた。善良な性質の人であつたから、弟たちにも皆親しまれていて、末のほうの弟などは親のように頼みにしているこの人が、遺言をしたりするようになったのを、だれも心細がらぬ者はなくて、家の使用人なども皆悲しんでいるのである。朝廷でも非常にお惜しみになつて、いよいよ危篤といふことが天聴に達すると、にわかに権大納言に昇任おさせになった。この感激によつて元氣が出てもう一度だけは参内を^{みかど}するかと帝は期しておいになったのであるが、それをす

ることがもう衛門督にはできなかった。ただ病苦の中で拝任の表だけを草して奉った。大臣はこの朝恩の厚さを見てもさらに惜しく悲しくわが子が思われるのであった。左大將は常に親友の病をいたんで見舞いを書き送っているのであるが、昇任の祝いを述べに真先^{まっさき}に大臣家を訪問したのもこの人であった。衛門督の住んでいるほうの対の門内には馬や車がたくさん来ていて、忙し^{せわ}そうに人々が出入りしていた。今年にはいつてからは起き上がることもあまりできない衛門督であつたから、大官の親友を病室に招くことが遠慮されて恋しく思いながら逢えないことを思うと残念で、督は^{かみ}、

「失礼ですがやはりここへ来ていただくことにします。この場合のことでやむをえないとお許しくださるでしょう」

と挨拶^{あいさつ}をさせて、病室の床の近くに侍している僧などをしばらく外のほうへ出して大將を迎えた。少年時代から隔てなく交際して来た間柄であつたから、近く迫つた死別の悲しみは大將にとって親兄弟の思いに劣らないのである。今日だけは昇任^{ようじん}の悦びで気分もよくなっているであろうとこの人は想像していたのであるが、期待ははずれてしまった。

「どうしてこんなにまた悪くおなりになったのでしょうか。今日だけはめでたいのですから少し気分でもよくなつておられるかと思つて来ましたよ」

と言つて、病床に添えた几帳きちようの端を上げて中を見ると、

「全然私のようになくなつてしまいましたよ」

と言いながら、衛門督は烏帽子えぼしだけを身体からだの下へかつて、少し起き上がろうとしたが、

苦しうであつた。柔らかい白の着物を幾枚も重ねて、夜着を上には掛けていたのである。

病床の置かれた室は清潔に整理がされてあつて感じがよい。こんな場合にも規律の正しい病人の性格がうかがえるようであつた。病人というものは髪ひげや髭ひげも乱れるにまかせて気味の悪い所もできてくるものであるが、この人の痩せ細やせつた姿はいよいよ品のよい気がされて、枕まくらから少し顔を上げてものを言う時には息も今絶えそうに見えるのが非常に哀れであつた。

「御病氣の長かつたことから言えば、特別ひどく病人らしいお顔になつたとも言えませんよ。平生よりも美男に見えますよ」

こんなことを口では言いながらも大將は涙をぬぐつていた。

「同じ時に死のうなどと約束もしたではありませんか。悲しいことですよ。あなたの症状は何がどうして悪くなつたのだということも言ってくれる者がありませんから、親しい私でさえ何の御病氣だか知らないのがたよりないことですよ」

「自分ではいつ悪くなつて行くかわからずに来ましたよ。どこか苦しいときまつた患部もないものですから、病がこうまで早く進行するとも思わないうちに重態になつてしまったのですから、私はもう今では何が何やら知覚もなくなつている気がしています。惜しくもない私の命が祈りとか、願とかの力でさすがに引きとめられていることは苦痛なものですから、自身から早くなるのを望むようにもなつて変なものですよ。私とすればこの世から去つてしまうことで、いろいろな堪えがたい気持ちのすることもそれは少なくありません。親への孝行も中途までしかしてありませんし、私自身のためにも遺憾なことはありますが、そうしたいっさいのことよりも大事な煩悶はんもんを私はいだいているのです。この命の末になつてほかへ洩もらす必要はないとも思いますが、やはり自分一人だけで思っているには堪えられないのもあるのです。身内の者はあつても、その人たちに言い出す勇気を私は持つていません。それであなたにだけ言わせていただきますが、私が六条院様の感情をそこねているらしいことがありましてね、それを苦しんで心の中でお詫わびをして暮らすうちに病氣のようになつてしまったのですが、お招きがありまして、あの法皇様の賀宴の試楽の日にお伺いしました時に、お目にかかったのですが、なお許していただけない御感情のあるのを顔で私は知つて、それからの私はもう生きていることがはばかりのあることのように思

われ出して、憂鬱^{ゆううつ}な気持ちで暮らして来たのですが、その際に受けた衝動が強かったために、起ち^たがたい衰弱に自分で自分を導いてしまったのですよ。自身の無能なことは承知しながらも少年時代から深く御信賴して、誠心誠意この方のためにお尽くししようと決心していた私ですが、中傷した者でもあつたらうかと、死んで残るこの問題への関心はむろん後世^{ごせ}の往生の妨げになるだろうと思つていますが、何かの機会にこの話をあなたは覚えていてくださつて六条院へ弁明の労を取つてください。死にましてからでもこのお取りなしがいただければ私はあなたに感謝します」

新大納言はこう語るうちにも病苦の堪えがたいもののある様子も見えて、大将は悲しんだのであるが、その話について思いあたるのが、この人にあつても、不確かな断定はそれでできない気がした。

「あなた自身の誤解ではないのですか、少しもそんな御様子を私は見受けませんよ。あなたの御病気の重くなつたことで御心配をしておられて、いつも遺憾がっついておいでになりますよ。そんな煩悶^{はんもん}をあなたがしておいでになるのなら、なぜ今までに私へ言つてくださらなかったのでしょうか。私が及ばずながら双方の誤解を解いてあげるのです。もう間に合いませんね」

取り返したいように大將は残念がった。

「そうですよ。少し快い時もあつたのですから、そんな時に御相談をすればよかつたのです。自分自身でわからないのが命にもせよ、まさかこんなに早く終わろうとは思わなかつたというのとはかないわけですね。このことは絶対にだれへもお話しにならないでください。よい機会に私のために御好意のある弁解をしていただきたいと思つてお話しただけです。一条にいらつしやる宮様には何かの時に御好意を寄せてあげてください。お聞きになつて法皇様が御心配をあそばさないように、御生活の上のことも気をつけてあげてください」

などとも大納言は言つた。もつと言いたいことは多かつたであろうが、我慢のならぬほど苦しくなつた衛門督^{えもんのかみ}は、もう帰れと手を振つて見せた。加持^{かじ}をする僧などが近くへ来て、母の夫人や大臣も出てくるふうで、騒がしくなつたので大將は泣く泣く辞し去つた。同胞である院の女御^{によう}はもとより、妹の一人である大將夫人も衛門督のことを非常に歎^{なげ}いていた。だれのためにもよき兄であらうとする善良な性格であつたから、右大臣夫人などもこの人とだけは今まで非常に親しんでいて、今度も玉鬘^{たまかざら}は心配のあまり自身の手でも祈禱^{きとう}をさせていたが、そうしたことも不死の薬ではなかつたから効果は見えなかつた。夫

人の宮にもしまいにお逢いできないままで、泡が消えたように衛門督は死んでしまった。今まで愛情の点では批議すべき点もあったが、形式的にはよく御待遇をして、あくまで御降嫁を得た夫人として敬意を失わない優しい良人であったのであるから、恨めしい思いを格別宮は抱いておいでにならなかった。こんな短命で終わる人であったから何にも興味が持てない寂しいふうを見せたのであったかと追想あそばされるのが悲しかった。御息所も早く不幸な未亡人に宮のおなりになったことを悲しんでいた。衛門督の死で大臣と夫人はまして言いようもない、悲歎に沈んでいた。自分が先に死ぬのが当然なことであるのに、あまりにも道理にはずれた死であると泣きこがれているが、それが何のかいのあることとも見えなかった。女三の宮は衛門督の恋を苦しくばかり思いになって、長く生きていようとお望みにならなかったのであるが、死の報をお得になつてはさすがに物哀れなお気持ちになった。若君を自身の子のように衛門督は思っていたが、衛門督の死におあいになつてみると、神秘的なかわりもある気があそばされて、衛門督が信じていたことがほんとうであったかもしれぬとお思われになり、いよいよ御自身の運命の悲しさにお泣きになるのであった。

三月になると空もうらかな日が続き、六条院の若君の五十日の祝い日も来た。色が白

くて、美しいかわいい子でもう声を出して笑ったりするのであった。院がおいでになって、「もうさっぱりした気分になりましたか。でも御恢復かいふくになったかいありませんね。今までのあなたでこうして快よくおなりになったのを見ることができたらどんなにうれしいだろう。あなたは冷酷に私を捨てておしまいになりましたね」

と涙ぐんで恨みをおいになった。毎日こちらの御殿へおいでにならぬ日はなくなって、こうした今になって最上のお扱いをあそばされるのであった。五十日の儀式に母君が尼姿でおいでになるのは、若君の将来を祝うことに不都合ではないかという意見をもつ女房たちもあって、どうしようかと言われているところへ院がおいでになって、

「少しもさしつかえない。若君が女であれば母君の運命にあやかってはならないとも考慮すべきだが」

とお言いになり、南向きの座敷に若君の小さい席を設けて祝い膳ぜんが供えられた。新しい乳母めのとたちは皆はなやかな服装をしていて、お膳部から女房たちのためのお料理の盛られた器まで皆きれいな感じのする式場であった。真相を知らぬ人々の寄贈したおびただしい祝品のあるのを御覧になっても、この誤りを正しくしがたい心苦しさから恥ずかしくばかりおなりになる院であった。尼宮も起きておいでになった。切りそろえられた髪さきの尖が厚く

いっぱいに^{ひろ}拡がるのを苦しくお思いになり、額の毛などを後ろへなでつけておいでになる時に、院は^{きちよう}几帳を横へ寄せてそこへおすわりになると、宮は羞^はじて横のほうへお向きになったが、以前よりもいっそう小柄にお見えになって、髪は授戒の日にお扱^{うす}いた僧が惜しんで長く残すようにして切ったのであるから、ちよつと見ては普通の方のように思われた。次々に濃くした鈍^{にび}の幾枚かをお重ねになった下には黄味を含んだ淡色^{うす}の単衣^{ひとえ}をお着になって、まだ尼姿になりきつてはお見えにならず、美しい子供のような気がしてこれが最もよくお似合いになる姿であるとも艶^{えん}に見えた。

「墨染めという色は少し困りますね。どうしても悲しい色でね、目がくらむ気がします。こうおなりになつてもいっしよに暮らすことができるのだからと思つて、みずから慰めようとしています。まだ今でも涙だけはあきらめてくれずに流れ出すので困りますよ。こんなふうにあなたに捨てられたのも、私自身の罪であると考えられることも苦痛のきわみですよ。取り返せないものだろうか」

と院は御歎^{たんそく}息をあそばして、

「ほんとうの尼の気持ちになつておしまいになれば、それは病気のためでなく、私がいやにおなりになつたためにそうおなりになつた気もして、私は情けないでしょうよ。やはり

私を愛してください」

こうお言いになると、

「この境地にいては人を愛したりすることができないものだと言っていますもの、まして私などは初めから愛するということがわからなかったのですから、どうお返事を申し上げればいいか存じません」

と宮はお返辞をあそばされる。

「しかたのない方ですね、おわかりになることもあるでしょうが」

と言いさしたまま院は言葉をお切りになつて、若君を見ようとあそばされた。乳母めのとには貴族の出の人ばかりが何人も選ばれて付いていた。その人たちを呼び出して、若君の取り扱いについての注意をお与えに院はなるのであつた。

「かわいそうに未来の少ない老いた父を持つて、おくればせに大きくなつてゆこうとするのだね」

と言つて、お抱き取りになると、若君は快い笑みえをお見せした。よく肥ふとつて色が白い。大将の幼児時代に思い比べてごらんになつても似ていない。女御にようこの宮方は皆父帝のほうによく似ておいでになつて、王者らしい相貌そうぼうの氣高けだかいところはあがあるが、ことさらお美しい

ということもないのに、この若君は貴族らしい上品なところに愛嬌あいきようも添そっていて、目つきが美しくよく笑うのを御覧になりながら院は愛情を感じになった。思いなしか知らぬが故衛門督えもんのかみによく似ていた。これほどの幼児でいてすでに貴公子らしいりっぱな眼眸めつきをして艶えんな感じを持つていることも普通の子供に違ちがっているのである。母の宮はそうであるとも確たしかにはわかっておいでにならなかったし、その他の人はもとより気のつかぬことであつたから、ただ院お一人の心の中だけで、哀れな因縁であると故人のことを考えておいでになると、人生の無常さも次々に思われて涙のほろほろとこぼれるのを、今日は祝いの式ではないかと恥じてお隠しになり『五十八翁をうまさ方有後のちあり静思しづかにおもふ堪喜よろこび亦またたなげくにたへたり

堪嗟』とお歌いになった。五十八から十を引いたお年なのであるが、もう晩年になつた気があそばされて白樂天のその詩の続きの『慎勿頑愚つつしみてぐわんぐなんぢのちちにるなけれ似汝爺』を歌いたく思召したかもしれない。あの秘密にあづかつた者がここの女房の中にいるはずである。その人たちは自分を愚人として侮蔑ぶべつしているのであらうとお思われになることは不快であつたが、自分のことは忍んでもよいが、宮をその人たちはどう思っているかという点までを思うと、宮のためにおかわいそうであるなどと院はお思いになつて、あくまでも知らぬ顔が続けておいでになるのであつた。無邪氣にうれしそうな声をたてる若君の目つき、

口つきは知らぬ人にわからぬことであろうが、自分が見れば全くよく似ていとお思になる院は、親たちが子供でもあればよかったと言つて悲しんでいるのに、これを見せてやることもできず、秘密な所にこの子だけを形見に残して、あの思い上がった男が、自身の心から命を縮めて死んだかと衛門督が哀れにお思われになつて、失敬なことであると罪を憎んでおいでになつた感情も消え、泣かれておしまいになるのであつた。女房たちがいつの間にかお居間を出てしまつたのを御覧になつてから、院は宮の近くへお寄りになつて、「この人を何とと思うのですか、こんなにかわいい人を置いて、この世をよくも捨てられましたね。冷酷ですよ」

と不意にお言いかけになつた。宮は顔を赤めておいでになつた。

「たが世にか種は蒔^まきしと人間はばいかが岩根の松は答へん

かわいそうですよ」

ともそつとお言いになつたが、宮はお返辞もあそばさずにひれ伏しておしまいになつた。もつともであるとお思ひになつて、しいてものをお言わせしようともあそばされない。ど

んなお気持ちでおられるのであろう、奥深い感情などは持つておられぬが、虚心平氣でおいではなれないはずであると想像ができるのも心苦しいことであつた。

大將は衛門督えもんのかみが思い余つて自分に洩もらしたことはどんな訳のあることであらう。故人があればまで弱つていない時であつたなら、自身から言い出したことなのであるから、もう少し核心に触れたことも聞き出せたであらうが、もうあの際であつたのがおりを得ないことで残念であつたなどと考えていて、兄弟たち以上にこの人は故人を恋しがつていた。女三の宮がにわかに出家を遂げられたことも何か訳のあることらしい、そう大病でもおありにならなかつた方を、院が何の抗議もあそばされずに尼にさせておしまいになつてよいはずはないのである。二条の院の夫人があゝの重態になつていられた場合に、泣く泣く許しを乞こわれたのさえもお拒みになつたのであるからというようなことも大將は考えられ、衛門督の問題と女三の宮の御出家とは関連したことに違いないということに思いは帰着した。昔から宮をお思ひして、忍び余るような物思ひの影を自分などに見せたこともある人である、自制して表面うわべだけはあくまでも冷静で、この人の心には何を思つてゐるのかどうかうのに苦しむほどであつたが、感情に負けるところがあつて、あまりに彼は弱い男であつた、どんなにすぐれた恋人であつても、許されない恋に狂熱を傾け、最後に身を

あやまるようなことをしてはならないのである、一方の人のためにも気の毒なことであるし、彼が自身の命をそれに捨てたのも賢明なことではない、皆前生の因縁とはいいいながら、やはり軽率なことであつたと、大將は自身一人で思つていて夫人にも話さなかつた。またよい機会もなくて院に故人の心をお伝えすることもまだ果たさなかつた。大將としてはまたそれを話し出した時に秘密の全貌ぜんぼうの见られることも願つてゐるのであるから好機は容易に見いだせないのであるらしい。

故大納言の父母は涙の晴れ間もないほど悲しみにおぼれて暮らしているのであつて、日のたつ数もわからなかつた。法事などの用意も子息たちや婿君たちの手でするばかりであつた。供養する経巻や仏像も二男の左大弁が主になつて作らせていた。七日七日の誦經ずきようの日が次々来るたびに、その注意を子息たちがすると、

「もういつさい何も聞かせないようにしてくれ。あれに關した話を聴きけばまた悲しみが湧わくばかりだから、かえつてあれの行く道を妨げることになる」

と言うだけで、大臣も死んだ人のようになつていた。

一条の宮はまして終わりの病床に見ることもおできにならないままで良人おととを死なせておしまいになつたというお悲しみもあつて、その後の日の重なるにつけて広いお邸やしきはますます

す寂しいものになって、お召使いの人たちも減っていくばかりであった。大納言の恩顧を受けていた人たちだけは、故人の未亡人の宮に今も敬意を表しに来ることを忘れなかった。愛していた鷹狩りの鷹とか、馬とかを預かっていた侍たちはたよる所を失ったように力を落としながらも寂しい姿で出仕しているのがお目にはいったりすることなども宮のお心を悲しくさせた。手馴らしていた居間の道具類、始終弾いていた琵琶、和琴などの、今は絃の張られていないものなども御覧になるのが苦しかった。庭の木立ちがけむり、時を忘れずに花の咲こうとするのをおながめになって寂しかった。女房たちも皆喪服姿になつていて、あらゆるものから受ける印象が物哀れであつたある日の昼ごろに、高い前駆の聲がしてお邸の門にとまった車があつた。

「ぼんやりしていますとお亡くなりになつた殿様がおいでになつたのかと思いますよ」

と言つて泣く女房もあつた。それは左大將が訪問して来たのであつた。まず訪問の意を通じて来た。いつものように大納言の弟の左大弁とか、参議とかの来訪したのかと邸の人は思っていた所へ、品がよくてきれいな風采で身の取りなしのすぐれてりっぱな大將がはいつて来たのであつた。中央の間に続いた南向きの座敷に席を作つて客は迎えられた。普通の人たちのように女房だけが出て応接するのは失礼であるといつて、宮の母君の御

やすどころ
息所が逢った。

「あの不幸な友人を悲しみます心は身内の人たち以上ですが、形式的にはそれだけの志も見せられないのでございました。臨終のころ私へ託しましたこともありすから、宮様に對して十分の好意を私はお持ちしております。だれにも死はめぐってくるはずですが、しばらくでもあとへ残りました以上は友人の緣故でできますだけのお世話を申し上げたいと思ひまして、もう少し早く伺うつもりだったのですが神事などで御所の中の忙しいところに触^{しよくえ}穢^えのはばかりに引きこもらなければならなくなりますのいかがと遠慮がいたされしましたし、またお庭へ立たせていただくような伺い方は私の心も満足できることでないと思ひまして、つい日をたたせてしまったのでございます。大臣などのお歎^{なげ}きの深いのを聞いておりますが、親子の愛情とは別な御夫婦の間でいらつしやった宮様を、故人があんなに気がかりに考えておりましたことを思いますと、宮様のほうでもお悲しみになっていらつしやる程度もどれほどのことかと恐察されまして御同情に堪えません」

こう語っているうちにも大將はたびたび流れる涙をふいていた。清明な気高^{けだか}さがあつて、しかも美しく艶^{えん}な姿を大將は持つていた。御息所も鼻声になつて、

「悲しいのが無常の世の常と存じまして、悲しいことはまだほかにもいろいろあるのを思

いまして、私たち年のいった者はしいて氣を強く持とうと努めることもいたしますが、宮様はまだお若いのでございますから、悲しみに沈みきっておしまいになりまして、同じ世界へ行つておしまいになるのではないかと危険でなりませんほどのお歎きをしておいになりません。不幸な生まれの私が今まで生きておりまして、大納言をお死なせしたり、宮様を未亡人におさせしたりしていく運命をじつとそばでながめていねばならぬかと苦しゅうございます。近い御親しんせき戚関係でいらつしやいますから、もうお聞き及びでもございませうが、私はこの御結婚談の最初から御賛成は申し上げていなかったのでもございますが、大臣が熱心に御運動をなさいましたし、また法皇様もお許しになる様子でございましたから、それではそのほうがよろしいことで、私の考え方は間違っていたのかと考え直しまして、とうとう御結婚をおさせ申したのでございますが、こんな夢のような不幸が起こってくるのでございましたら、もっと自分の信じましたところを強く主張しておれば、宮様をこうした目におあわせせずに済んだはずであると残念でなりません。私は初めから宮様はよくよくの御因縁のあることでなければ結婚などはあそばしてはならないものである、神聖なものとしてお置き申し上げたいと昔風な心に願っていたのでございますから、こんなどちらつかずの御不幸なお身の上におなりあそばした以上は、いっそ悲しみでお亡なくな

りになるのもよろしかろう、不幸な宮様としてお残りになるよりはなどとも思いますが、さてそうもあきらめきれるものではございませんから、やはり悲しんでばかりおりましたうちにも、御親切な御慰問のお手紙を始終おいただきになるようでございますから、ありがたいことと存じておりまして、こうしていただけるのも故人が特に宮様のことでお頼みされたことがあったのかと、必ずしも御愛情の見える御良人ごりょうじんではなかったのですが、最後にどなたへも宮様についての遺言をなさいましたことで、悲しみにもまた慰めというもののあるのを発見したしたのでございます」

と言つて、御息所みやすどころはひどく泣き入る様子であつた。大将もそぞろに誘われて泣いた。

「昔は不思議な冷静な人でしたが、短命で亡くなるせいか、この二、三年は非常にめいつて見える時が多くて、心細いふうを見せられましたから、あまりに人生を考えた末に悟つてしまった清澄な心境というものかもしれないかと不安に思われると、小賢しく私が時々忠告らしいことをしますと、あの人は私を憐むあわれような表情で見えていました。何よりも宮様のお悲しみになつていらつしやいます御様子を伺いまして、もったいないことですが、おいたわしく存じ上げます」

などとなつかしいふうに話して、しばらくして大将は去って行こうとした。衛門督えもんのかみはこの人より五つ六つの年長であつたが、彼はきわめて若々しく見えて、女性的な柔らかさの見える人であつたが、これは重々しく端正で、しかも顔だけはあくまでも美しいのを、若女房などは悲しさも少し紛れたように興奮して、帰って行こうとする大将の姿にながめ入った。前の庭の桜の美しいのをながめて、「深草の野べの桜し心あらば今年ばかりは墨染めに咲け」と口へ出てくる大将であつたが、尼姿を言うようなことはここで言うべきでないと思はれて、「春ごとに花の盛りはありなめど逢あひ見んことは命なりける」と歌つて、

時しあれば変はらぬ色に匂におひけり片枝折れたる宿の桜も

と自然なふうに口ずさんで、花の下に立ちどまつていると、御息所はすぐに、

この春は柳の芽にぞ玉は貫ぬく咲き散る花の行くへ知らねば

という返しを書いてきた。高い才識の見えるほどの人ではないが、前には才女と言われた更衣こういであつたのを思つて、評判どおりに気のきいた人であると大將は思った。

大將はそれから太政大臣家を訪問したが、子息たちの幾人かが出て、こちらへと案内をしたので、大臣の離れ座敷のほうへ行つては無遠慮でないかと躊躇ちゆうちよをしながらはいつて行つて舅しゆうとに逢つた。いつまでも端麗な大臣の顔も非常に痩やせ細つてしまつて、髭ひげなども剃そらせないで伸びて、親を失つた時に比べて子を死なせたあとの大臣は衰え方がひどいと世間で言われるとおりに見えた。顔を見た瞬間から悲しくなつて流れ出した涙がいつまでも続いて流れてくるのを恥ずかしく思つて大將は押し隠しながら、一条の宮をお訪ねたずして来た話などをした。初めからしめつぽいふうであつた大臣はさらに多くの涙を見せて、故人の話を婿とし合つた。懷紙ふところがみへ一条の御息所が書いて渡した歌を大將が見せようとすると、

「目もよく見えないが」

と涙の目をしばたきながらそれを読もうとした。見栄みえも思わず目のためにしかめていた顔は、平生の誇りに輝いた時の面影を失つて見苦しかった。歌は平凡なものであつたが、「玉は貫ぬく」ということばは大臣自身にも痛切に感じていることであつたから、相憐あわれむ涙

が流れ出るふうで、すぐにまた言うのであった。

「あなたのお母さんが亡なくなられた時に、私はこれほど悲しいことはないと思ったが、女の人は世間と交渉を持つことが少ないために、不意にいろんな言葉が自分の痛い傷にさわるというようなこともなくて、今度のような苦しみをそのあとで感じることはなかったものです。賢くありませんでしたが、朝廷の御恩を受けて地位を得てゆくにしたがつて彼の庇護を受けようとするものが次第に多くなっていたのですから、彼の死に失望をした者もずいぶんあるでしょう。しかし親である私は、そんなふうに勢力を得ていたのに惜しいとか、官位がどうなっていたかというようなことではなくて、平凡な息子むすこである裸の彼が堪えがたく恋しいのです。どんなことが私のこの悲しみを慰めるようになるのでしょうかそれはありうることは思われません」

大臣は空間に向いて歎たんそく息をした。夕方の雲が鈍色にびにかすんで、桜の散ったあとの梢こずえにもこの時はじめて大臣は気づいたくらいである。

御息所の歌の紙へ、

このもとの雪に濡ぬれつつ逆さかしまに霞かすみの衣着かきたる春かな

と書いた。大將も、

亡^なき人も思はざりけん打ち捨てて夕べの霞君着たれとは

と書く。左大弁も、

恨めしや霞の衣たれ着よと春よりさきに花の散りけん

と書いた。

大納言の法事は非常に盛んなものであつた。左大將夫人が兄のためにささげ物をしたのはいうまでもないが、大將自身も真心のこもつたささげ物をしたし、誦^{ずきよう}經の寄付などにも並み並みならぬ友情を示した。

左大將は一条の宮へ始終見舞いを言い送っていた。四月の初夏の空はどこことなくさわやかで、あらゆる木立ちが一色の緑をつくつているのも、寂しい家ではすべて心細いことに

見られて、宮の御母子が悲しい退屈を覚えておいでになるころにまた左大将が来訪した。植え込みの草などもすでに青く伸びて、敷き砂の間々には強い蓬が広がりかえっていた。林泉に対する趣味を大納言は持つていて、美しくさせていたものであるが、そうした植え込みの灌木類や花草の類もがさつに枝を伸ばすばかりになって、一むら薄はその蔭に鳴く秋の虫の音が今から想像されるほどはびこつて見えるのも、大将の目には物哀れでしめつぽい気分がまず味わわれた。喪の家として御簾に代えて伊予簾が掛け渡され夏のに代えられたのも鈍色の几帳がそれに透いて見えるのが目には涼しかった。姿のよいきれいな童女などの濃い鈍色の汗衫の端とか、後ろ向きの頭とかが少しずつ見えるのは感じよく思われたが、何にもせよ鈍色というものは人をはつとさせる色であると思われた。今日は宮のお座敷の縁側にすわろうとしたので敷き物が内から出された。例の話し相手をする御息所に出てくれと女房たちは勧めているのであったが、このころは身体が悪くて今日も寝ていた。御息所の出て来るまで、何かと女房が挨拶をしている時に、人間の思いとは関係のないふうに快く青々とした庭の木立ちに大将はながめ入っていたが、気持ちは悲しかった。柏の木と楓が若々しい色をして枝を差しかわして立っているのを指さして、大将は女房に、

「どんな因縁のある木どうでしょう。枝が交じり合って信頼をしきっているようなのがいい」

などと言い、さらに簾みすのほうへ寄つて、

「ことならばならしの枝にならさなん葉守はもりの神の許しありきと

まだ御簾みすの隔てをお除きくださらないのが遺憾です」

と言つた。一段高くなつた室へやの長押なげしへ外から寄りかかっているのである。

「柔らかい形をしていらつしやる時に、また別な美しさがありますよ」
と女房らはささやき合うのであつた。今まで話していた少将という女房を取り次ぎにして宮はお返辞をおさせになつた。

「柏木に葉守の神は坐いますとも人馴ならすべき宿こすゑの梢か

突然にそうしたお恨みをお言いかけになりますことで御好意が疑われます」

と伝えられたお言葉に道理があると思つて大將は微笑した。その時に御息所がいぎつて来る氣配けはいがしたので大將は少しいずまいを直した。

「世の中のことをあまりに悲しく思い過ぐしますせいですが、身体からだのぐあいが悪うございまして、ぼけたようにもなつて暮らしておりますが、こうしてたびたびの御親切な御訪問に力づけられまして出てまいりました」

と御息所は言つたが、言葉どおりに病氣らしく感じられた。

「故人をお悲しみになりますことはごもつとも至極なことですが、しかしそんなにまで深くお歎なげきになつてはよろしくないでしょう。この世のことはみな前生からのきまつている因縁の現われですから、そう思えばさすがに際限もなく悲しみばかりの続くものでないことがわかると思ひますが」

などと大將は慰めていた。この宮は以前うわさ噂に聞いていたよりも優美な女性らしいが、お氣の毒にも良人おっとにお別れになつた悲しみのほかに、世間から不幸な人におなりになつたことを憐あわれまれるのを苦しく思つておいでになるのであらうと思う同情の念がいつかその方を恋しく思う心になつてゆくのをみずから認めるようになった大將は熱心に宮の御近状などを御息所に尋ねていた。御容貌きりようはそうよくはおありでならないであらうが、醜くて氣

の毒な気持ちのする程度でさえなければ、外見だけのことでその人がいやになるようなことがあったり、ほかの人に心移すようなことは自分にできるはずがない、そんな恥知らずなことは自分の趣味でない、性格のよしあしで尊重すべき女と、そうでない女は別けらるべきであるなどと思っていた。

「もうお心安くなったのですから、衛門督^{えもんのかみ}をお取り扱いになりましたごとく、私を他人らしくなく御待遇くださいますように」

などと、恋を現わして言うのではないが、持ってほしい好意をねんごろに要求する大将であつた。その直衣姿^{のうし}は清楚^{せいそ}で、背が高くりっぱに見えた。

「六条院様はなつかしく艶^{えん}な美貌^{びぼう}で、そしてお品のよい愛^{あい}嬌^{きょう}が無類^{あいきょう}なのですよ。この方は男らしくはなやかで、ああきれいだと思う第一印象がだれよりもすぐれておいでになりますよ」

などと女房たちは言つて、

「かなうことなら宮様の殿様におなりになつて始終おいでくださることになればいい」

こんなことまでも思つたに違いない。「右將軍が墓に草はじめて青し」と大将は口ずさみながらも、この詩も近ごろ逝^いつた人を悼^{いた}んだ詩であることから、詩の中の右將軍の惜し

まれたと同じように、世人が上下こぞつて惜しんだ幾月か前の友人の死を思うのであった。
帝^{みかど}も音楽の遊びを催される時などには、いつの場合にも衛門督^{えもんのかみ}を御追憶あそばすのであった。「ああ衛門督^{あわ}が」という言葉を何につけても言わない人はないのである。六条院はまして故人をお憐^{あわ}れみになることが月日に添えてまさつていった。宮の若君を院のお心だけでは衛門督の形見と見ておいでになるのであるが、だれも、この形見のあるのは知らぬことであつたから、何ものからも面影をとらえることは不可能だと思つて衛門督を悲しんでいるのであつた。秋になつたころからこの若君は這^はいなどなさる様子が言いようもないくらいかわいいので、院は人前ばかりでなく、しんからいとして、いつも抱いて大事になさるのであつた。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

※このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年1月15日4版を使用しました。

入力：上田英代

校正：鈴木厚司

2004年2月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

柏木

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>